

# 夢のかけはし

手毬が人と人とを  
笑顔でつなぐ。



今から25年ほど前。鹿屋市内の手芸店に飾ってあった手毬を見て、自分で作ってみたいと強く思いました。これが「手毬」と私の初めての出会いです。

「これからの人生は、母ちゃんが好きなことをして過ごさんね」と息子たちの言葉に後押しされ、手芸店の方に連絡先を聞き、手毬を作っている人に1週間だけ作り方を習いました。試行錯誤して初めて作ってみた自分の手毬を、教えてくれた人に見せたところ、「色の合わせ方が上手」だと褒めてもらい、自分は手毬づくりに向いているのかもと思い、それをきっかけに手毬づくりを本格的に始めました。

最初の頃は、少しでも家計の足しになればと、自分で作った手毬を商品として取り扱ってもらった時期もありましたが、だんだん、売ることよりも、もっと多くの人に自分の手毬をみてもらいたいと思うようになり、それからは人に差し上げたり、公共施設等に展示していただいたりして、今では、「手毬のおばちゃん」として、いろんな人に声をかけてもらえるようになったことが、何よりうれしいです。

40代の頃から手がこわばっていき、病気を抱えています。今のところ、手を動かしているせいか、その症状はみられず、手毬づくりのおかげかなと喜んでいるところ

## 手毬づくり名人 かどくらのぶこ 門倉 信子 さん

手毬づくりは、とても根気がいる作業ですが、繊細で、美しい模様が出来上がったときが、その魅力を感じる一番の瞬間です。

手毬を手にした人が「わあーっ」と驚く様子や、喜んでくれた人の表情を見るたび、好きな手毬づくりを続けさせてくれた息子たちにもいつも感謝しています。

これからも手毬をいろんな人に知ってもらい、その魅力を伝えていきたいです。これからも元気で長生きして、手毬で人と人とを笑顔でつなぎ合わせ、その笑顔の輪が広がっていくことを望んでいます。



複雑な糸と色の導きによる華麗な作品も、今では朝から作ればその日の夕方には出来上がる。【右】

ビニール袋にもみ殻を入れ、ゴムひもで丸い形を作る最初の作業。より丸い形に仕上げるかで、出来上がりが左右される。【左】

昭和5年生まれ。手毬づくりは長時間の手作業になるが、今でも肩こり知らずの湿布いらず。じっとしていられない性分で、ほかにもビニール紐でカゴなどを作る。吾平町上名に息子と一緒に2人で暮らす。(89歳)